

第3章 津久見市の歴史文化の特性

第1章で概観した本市の自然的・地理的環境、社会的環境、歴史的環境と、第2章で概観した本市の文化財の概要を踏まえ、本市の歴史文化の特性を整理すると三つにまとめられる。

この三つの特性は本市の長い歴史、自然、文化そのものの総体である「津久見らしさ」を表し、過去から現在、そして未来に受け継がれるものである。

【津久見市の歴史文化の特性】

1. 豊かな自然とともに生きる歴史文化
2. 宗麟の統治によって生み出された歴史文化
3. 近世の分割から統一への過程の中で育まれた歴史文化
—明治以降の津久見の発展—

1. 豊かな自然とともに生きる歴史文化

【概要】

本市は、豊後水道に面した津久見湾と三方を山で囲まれた地域である。津久見湾に浮かぶ島々や海に迫る懸崖から、宇宙や地球の歴史に関わる痕跡が発見され、大地の歴史を知ることができる。このような海や山、大地から得られる恵みを利用して本市に住む人たちは生活を行ってきた。

本市は、豊後水道に面した津久見湾と鎮南山・姫岳・碁盤ケ岳・彦岳といった山々で囲まれている地域である。津久見湾に浮かぶ島々や海に迫る懸崖からは、宇宙や地球の歴史に関する痕跡が発見されており、大地の歴史を知ることができる。このような海や山、大地から得られる恵みを利用して本市に住む人たちは生活を行ってきた。

リアス海岸である津久見湾一帯では、古くから天然の瀬や礁に恵まれた生産性の高い漁場として漁撈活動が行われてきた。江戸時代に入り、市域が臼杵藩と佐伯藩の二つに分かれた後も、それぞれの藩の浦方に住む人たちは古代からの伝統漁法を受け継ぎ、豊かな海の資源を利用して漁撈生活を続けた。特に、佐伯藩領下では、漁業資源の保護とともに魚つき林の保護による漁場の保全が行われており、漁業は本市における重要な産業として守られてきたことが分かる。

17世紀後半から、豊後水道沿岸に位置する両藩ともに、質の良い肥料である干鰯の生産のため鰯漁が盛んになっていった。現在も漁業は基幹産業の一つとなっており、特にマグロ漁業が盛んになっている。

津久見湾は生産性の高い漁場というだけでなく、本市に温暖な気候をもたらした。海岸には連続するウバメガシ等の樹林やアコウ等の自生木が育ち、ウバメガシは薪炭林や防風林、防潮林等として今も人々の暮らしを支えている。

本市では温暖な気候を活かしたみかん栽培が古くから行われており、尾崎小ミカン先祖木(国

指定天然記念物)はその歴史の長さを伝えている。特に江戸時代以降は豊後国のみかんの主要産地の一つとして重要な位置を占めるようになり、臼杵藩領下の青江地区を中心に小みかんが栽培されるようになった。その後、小みかんから温州みかんに栽培の中心が変わっていったが、現在も「津久見みかん」として本市の名産品となっている。

一方、半島の尾根筋や内陸にかけては、山や大地の恵みである森林資源・鉱物資源を利用した生活が行われてきた。本市の山地にある豊富な森林資源は、樵木の伐採や炭焼きを主とする山稼ぎを支えた。江戸時代に椎茸栽培の始源伝承の一つである鉋目式椎茸栽培法が確立されると、豊後茸山師と呼ばれる人たちが西日本一帯に出かけ椎茸栽培を行うようになった。その出稼ぎ人の多くは本市出身者であった。

鉱物資源は阿蘇溶結凝灰岩や石灰石が人々に利用されてきた。青江川上流域に分布する阿蘇溶結凝灰岩は灰石とも呼ばれ、この一帯の人々は古くから石塔や建築石材として利用してきた。海岸から胡麻柄山・碁盤ヶ岳方面に連なる石灰岩の山塊は、江戸時代以降臼杵藩の重要産業となった石灰焼きに加えて、大正6年(1917)以降はセメント鉱業にも利用されてきた。石灰・セメント関連産業は今も本市の基幹産業の一つとなっている。

そのほか、市内の半島部には、えびす信仰はじめ金毘羅信仰等、自然やその恵みに感謝する素朴な信仰や、霜月祭りヨドの火焚きやとんどといった特徴的な伝統行事が多く残っており、今に伝えている。

このように、本市に住む人々は山や海といった豊かな自然と共存しながら生活を行ってきた。生活を支える産業や信仰、伝統行事は、人々が豊かな自然とともに生きてきたことを伝えている。

2. 宗麟の統治によって生み出された歴史文化

【概要】

本市は、戦国時代に中北九州六か国を支配した武将として、またキリシタン大名として知られる大友宗麟の終焉の地である。そのため、市内には大友宗麟公墓をはじめとして関連する文化財が数多く残る。

本市は、戦国時代に中北九州六か国を支配した武将として、またキリシタン大名として知られる大友宗麟(1530～1587)の終焉の地である。そのため、市内に大友宗麟公墓(市指定史跡)をはじめとして関連する文化財が残る。

中世の本市は豊後国海部郡臼杵荘に含まれ、大友氏の支配下にあった。天正12年(1584)のポルトガル宣教師ルイス・フロイスの報告に「宗麟は老後の休息所として息子義統からこの地を与えられたので、ここに移り、立派な家を建て、ミサを行う祈祷所(天徳寺)を設けた。」とある。

宗麟は、天正6年(1578)、受洗してドン・フランシスコと名乗った。その年、日向国に侵攻、キリスト教王国の建設にとりかかるが、島津軍との戦いに敗れ、敗走して津久見に入った。こ

れが宗麟と津久見との最初の関わりであった。その後、天正10年（1582）に22代義統から直轄地であった津久見を譲り受けた宗麟は、当地に移り住み、再びキリスト教王国の実現を目指した。

津久見川河口に位置する大友公園に、大友氏別館と呼ばれた宗麟の館があった。「臼杵小鑑」^{うすきこかがみ}や「大友松野系図」に出てくる「岩屋茶亭」とは、この館のことである。

宗麟が津久見に移る際、及び移ってから実行したことは、「宗麟夫婦の住む家屋敷を建て、ミサを行う祈祷所を設けた」、「三か所の寺院の仏像・経典を焼却させた」、「津久見に神父・修道士をおのおの1名常駐させた」、「2,000人以上の僧侶・百姓等の異教徒に説教を聞かせ、洗礼を受けさせた」の四つとされる。

このうち、僧侶・百姓等の異教徒に説教を聞かせ、洗礼を受けさせたことについては、天正14年（1586）10月2日の宣教師ペトロ・ゴメツの書翰や「解脱寺古峯寺請証文」（解脱閣寺文書・正保3年（1646））に、実際に改宗が行われたことが記されており、キリスト教王国建設に向けた改宗作業は半ば強制的に実行されたことが分かる。

天正14年（1586）11月、島津軍が日向から北上して豊後国に侵攻し、市域も戦場と化した。近世臼杵藩稲葉家に伝わる「御領分臼杵図」（臼杵市教育委員会蔵）からも、本市で激しい戦闘があったことが分かる。この絵図には、古陣所や物見山、砦・付城要地^{つけしろ}、津久見川と青江川流域を隔てた山の稜線近くやその一帯で大勝負や小競り合い^{こせりあひ}があった場所が記されている。そのうち、津久見川左岸の丘陵上にある古陣所は、薬師寺文書に記されている津久見要害である可能性が高く、かつては津久見氏の詰城であったと考えられる。

また、海路侵入してきた島津軍と、四浦衆が守る久保泊城をめぐる攻防が津久見四浦合戦である。この時島津軍は兵船200艘で攻めたが、天然の要害からの鉄砲による応戦のため攻め落とすことができなかつたと伝えられている。久保泊城跡には今なお曲輪や小規模ながら堀切が残る。

本市には、このように宗麟はじめ薬師寺氏等家臣団に関係する文化財が各所に残る。その一つである民俗芸能「津久見扇子踊り」（大分県指定無形民俗文化財）は、大友氏が支配していた時代に始まるといわれ、本市が宗麟の没した地であることから創始を宗麟にあて、現在もお盆の供養踊りとして舞われている。

また本市と太平洋セメント株式会社が所蔵する南蛮資料は、宗麟の生きた時代、宗麟が憧れた南蛮文化の姿を今に伝える資料群で、16世紀から17世紀初頭にかけて隆盛した南蛮文化や、その時代的背景を、また国際的視野を持った武将として高く評価される宗麟の一面を知ることができる。

津久見が歴史の表舞台に出てくるのは宗麟の時代からである。宗麟は単に隠棲地としてこの地を選んだのではなく、立地条件、キリスト教の布教や南蛮人との交流等、海外への雄飛、もしくは国際交流を意識してこの地を選んだものと思われる。

宗麟が津久見で過ごした時期はごく限られたものであったが、本市にもたらした影響は極めて大きく、残された文化財から知ることができる。

ちなみに、16世紀、宗麟はこの豊後水道を利用して、中国の明やポルトガルとの貿易を行っていたことを鄭舜巧^{ていしゅんこう}（中国明後期の探検家）が「日本一鑑」^{にほんいつかん}の中で記している。

3. 近世の分割から統一への過程の中で育まれた歴史文化 —明治以降の津久見の発展—

【概要】

明治5年（1872）に本市は大分県第四大区に編成され、初めて一つの行政区となった。こうした近代化の波は、本市を取り巻く環境にも大きな影響を与えた。特に、江戸時代後期から続いたみかん栽培や石灰産業は、急速な発展を遂げ、後年のセメント鉱業とともに、今日の本市の経済の基盤を形成している。

江戸時代の末期から明治初期は「明治維新」と呼ばれ、政治・経済・社会ともに大きく変わった。

江戸時代の市域は、臼杵・佐伯両藩により分割して治められてきた。宮山（宮野峠）と津久見湾に浮かぶ白石を見通した線がその藩境とされ、それぞれ城下町から最も離れた地域とされてきた。そのため村方・浦方の人たちの生業は、特異な支配体制の中から生み出された。しかし、時代が経つにつれて、この地に住む人たちの日常の生活や生業は少しずつ津久見としてのまとまりを作っていた。

特に、江戸時代の終わりごろになると、海に活路を見出し、津久見の廻船が特産品を積み、豊後水道を利用して各地で交易を行ったことが知られている。それはまさに地の利を活かした津久見の人たちの知恵であり、たくましさの証でもあった。

明治4年（1871）の廃藩置県により市域は臼杵県・佐伯県に分かれ、翌5年（1872）の大区小区制により大分県第四大区に編成されたことで、本市は初めて一つの行政区となった。

これあらた「維新なり」と解される明治維新を境とした明治から大正にかけての近代化の波は、本市を取り巻く環境にも大きな影響を与えた。特に、江戸時代の終わりごろから臼杵藩領を中心に行われてきたみかん栽培や石灰産業が急速な発展を遂げ、後年のセメント鉱業とともに、今日の本市の経済の基盤を形成していった。

その要因ともなった象徴的なできごとが、大正5年（1916）の津久見駅開業（日豊線臼杵—佐伯間開通、大正12年（1923）日豊線全通）であった。これを機に、翌6年（1917）に桜セメント株式会社九州工場が徳浦に進出し、その後も大分セメント株式会社、太平セメント株式会社といったセメント工場の進出が相継いだ。当時の大戦景気により軍事用のセメントの需要が高まったことが最大の要因とされている。さらに柑橘業においても、津久見みかんの販路拡大につながっていった。

津久見駅前周辺のウバメガシが生育する一帯は、かつて砂浜が広がる海岸線であったが、昭和初期に既に埋め立てられ、瓦葺の商家が建ち並ぶようになっていった。津久見川河口は、主要な港であった岩屋船溜や角崎付近の船溜が整備されており、津久見港の沖合に大型の帆船が停泊するなど、海上輸送による石灰石・石灰・セメント等の移出や輸出が盛んになった。それまで四周を海と山に囲まれ半農半漁の生活を送ってきた本市であったが、陸路・海路による輸送が活発になり、大きく発展した。

産業が進展したこの時期、築港、埋め立てや道路（新道）の開発、改修等都市基盤の整備も

徐々にではあるが進められた。その代表的なものが明治10年（1877）の角崎と警固屋を結ぶ道（小網代通り）の開削工事であった。市内には明治から大正、昭和に至る間にこうした土木・産業・教育等に功績のあった先覚者等の業績を記した顕彰碑等が数多く残っている。